

小崎弘道研究

— 聖靈信仰を中心に —

原 島 正

はじめに

小崎弘道（一八五六一—一九三八）の信仰と思想には、聖靈信仰を核として、政治論、徳育論、宗教論に及ぶ、ひとつの構造を見出すことができる。本論は、その構造を明らかにすることを目指している。

小崎の聖靈信仰は、彼のキリスト教へ改信のときの経験に由来する。そこで、最初に小崎の改信にいたる経過をたどる。次に彼が取り組んだ課題を述べ、信仰と思想の相互連関を明らかにする。そして、小崎の聖靈信仰、とりわけ、聖靈なる神への信仰は小崎特有の進化論受容と結びつくことで、小崎の自然観・歴史観・キリスト教観を形成する。そこで、小崎の進化論にたいする見解と小崎の思想の全体に与えた影響、とりわけ「神の内住」の思想を考察する。

一、小崎の改信について

小崎は熊本洋学校の出身で、ゼーンズ (L.I. Jones) にキリスト教を学んだ一人であるが、「奉教趣意書」には名を記していない¹⁾。友

人たちが次々に新しい宗教に改信し、意気軒高としていたとき、小崎はその生涯で最も不愉快なる月日を送っていたのである。小崎によれば、生涯中この二三ヶ月ほど苦しき不愉快だったときはなく、遲疑苦悩の結果、脳をわずらい、数十日の間、床についてしまった²⁾、³⁾、⁴⁾、⁵⁾、⁶⁾、⁷⁾、⁸⁾、⁹⁾、¹⁰⁾、¹¹⁾、¹²⁾、¹³⁾、¹⁴⁾、¹⁵⁾、¹⁶⁾、¹⁷⁾、¹⁸⁾、¹⁹⁾、²⁰⁾、²¹⁾、²²⁾、²³⁾、²⁴⁾、²⁵⁾、²⁶⁾、²⁷⁾、²⁸⁾、²⁹⁾、³⁰⁾、³¹⁾、³²⁾、³³⁾、³⁴⁾、³⁵⁾、³⁶⁾、³⁷⁾、³⁸⁾、³⁹⁾、⁴⁰⁾、⁴¹⁾、⁴²⁾、⁴³⁾、⁴⁴⁾、⁴⁵⁾、⁴⁶⁾、⁴⁷⁾、⁴⁸⁾、⁴⁹⁾、⁵⁰⁾、⁵¹⁾、⁵²⁾、⁵³⁾、⁵⁴⁾、⁵⁵⁾、⁵⁶⁾、⁵⁷⁾、⁵⁸⁾、⁵⁹⁾、⁶⁰⁾、⁶¹⁾、⁶²⁾、⁶³⁾、⁶⁴⁾、⁶⁵⁾、⁶⁶⁾、⁶⁷⁾、⁶⁸⁾、⁶⁹⁾、⁷⁰⁾、⁷¹⁾、⁷²⁾、⁷³⁾、⁷⁴⁾、⁷⁵⁾、⁷⁶⁾、⁷⁷⁾、⁷⁸⁾、⁷⁹⁾、⁸⁰⁾、⁸¹⁾、⁸²⁾、⁸³⁾、⁸⁴⁾、⁸⁵⁾、⁸⁶⁾、⁸⁷⁾、⁸⁸⁾、⁸⁹⁾、⁹⁰⁾、⁹¹⁾、⁹²⁾、⁹³⁾、⁹⁴⁾、⁹⁵⁾、⁹⁶⁾、⁹⁷⁾、⁹⁸⁾、⁹⁹⁾、¹⁰⁰⁾、¹⁰¹⁾、¹⁰²⁾、¹⁰³⁾、¹⁰⁴⁾、¹⁰⁵⁾、¹⁰⁶⁾、¹⁰⁷⁾、¹⁰⁸⁾、¹⁰⁹⁾、¹¹⁰⁾、¹¹¹⁾、¹¹²⁾、¹¹³⁾、¹¹⁴⁾、¹¹⁵⁾、¹¹⁶⁾、¹¹⁷⁾、¹¹⁸⁾、¹¹⁹⁾、¹²⁰⁾、¹²¹⁾、¹²²⁾、¹²³⁾、¹²⁴⁾、¹²⁵⁾、¹²⁶⁾、¹²⁷⁾、¹²⁸⁾、¹²⁹⁾、¹³⁰⁾、¹³¹⁾、¹³²⁾、¹³³⁾、¹³⁴⁾、¹³⁵⁾、¹³⁶⁾、¹³⁷⁾、¹³⁸⁾、¹³⁹⁾、¹⁴⁰⁾、¹⁴¹⁾、¹⁴²⁾、¹⁴³⁾、¹⁴⁴⁾、¹⁴⁵⁾、¹⁴⁶⁾、¹⁴⁷⁾、¹⁴⁸⁾、¹⁴⁹⁾、¹⁵⁰⁾、¹⁵¹⁾、¹⁵²⁾、¹⁵³⁾、¹⁵⁴⁾、¹⁵⁵⁾、¹⁵⁶⁾、¹⁵⁷⁾、¹⁵⁸⁾、¹⁵⁹⁾、¹⁶⁰⁾、¹⁶¹⁾、¹⁶²⁾、¹⁶³⁾、¹⁶⁴⁾、¹⁶⁵⁾、¹⁶⁶⁾、¹⁶⁷⁾、¹⁶⁸⁾、¹⁶⁹⁾、¹⁷⁰⁾、¹⁷¹⁾、¹⁷²⁾、¹⁷³⁾、¹⁷⁴⁾、¹⁷⁵⁾、¹⁷⁶⁾、¹⁷⁷⁾、¹⁷⁸⁾、¹⁷⁹⁾、¹⁸⁰⁾、¹⁸¹⁾、¹⁸²⁾、¹⁸³⁾、¹⁸⁴⁾、¹⁸⁵⁾、¹⁸⁶⁾、¹⁸⁷⁾、¹⁸⁸⁾、¹⁸⁹⁾、¹⁹⁰⁾、¹⁹¹⁾、¹⁹²⁾、¹⁹³⁾、¹⁹⁴⁾、¹⁹⁵⁾、¹⁹⁶⁾、¹⁹⁷⁾、¹⁹⁸⁾、¹⁹⁹⁾、²⁰⁰⁾、²⁰¹⁾、²⁰²⁾、²⁰³⁾、²⁰⁴⁾、²⁰⁵⁾、²⁰⁶⁾、²⁰⁷⁾、²⁰⁸⁾、²⁰⁹⁾、²¹⁰⁾、²¹¹⁾、²¹²⁾、²¹³⁾、²¹⁴⁾、²¹⁵⁾、²¹⁶⁾、²¹⁷⁾、²¹⁸⁾、²¹⁹⁾、²²⁰⁾、²²¹⁾、²²²⁾、²²³⁾、²²⁴⁾、²²⁵⁾、²²⁶⁾、²²⁷⁾、²²⁸⁾、²²⁹⁾、²³⁰⁾、²³¹⁾、²³²⁾、²³³⁾、²³⁴⁾、²³⁵⁾、²³⁶⁾、²³⁷⁾、²³⁸⁾、²³⁹⁾、²⁴⁰⁾、²⁴¹⁾、²⁴²⁾、²⁴³⁾、²⁴⁴⁾、²⁴⁵⁾、²⁴⁶⁾、²⁴⁷⁾、²⁴⁸⁾、²⁴⁹⁾、²⁵⁰⁾、²⁵¹⁾、²⁵²⁾、²⁵³⁾、²⁵⁴⁾、²⁵⁵⁾、²⁵⁶⁾、²⁵⁷⁾、²⁵⁸⁾、²⁵⁹⁾、²⁶⁰⁾、²⁶¹⁾、²⁶²⁾、²⁶³⁾、²⁶⁴⁾、²⁶⁵⁾、²⁶⁶⁾、²⁶⁷⁾、²⁶⁸⁾、²⁶⁹⁾、²⁷⁰⁾、²⁷¹⁾、²⁷²⁾、²⁷³⁾、²⁷⁴⁾、²⁷⁵⁾、²⁷⁶⁾、²⁷⁷⁾、²⁷⁸⁾、²⁷⁹⁾、²⁸⁰⁾、²⁸¹⁾、²⁸²⁾、²⁸³⁾、²⁸⁴⁾、²⁸⁵⁾、²⁸⁶⁾、²⁸⁷⁾、²⁸⁸⁾、²⁸⁹⁾、²⁹⁰⁾、²⁹¹⁾、²⁹²⁾、²⁹³⁾、²⁹⁴⁾、²⁹⁵⁾、²⁹⁶⁾、²⁹⁷⁾、²⁹⁸⁾、²⁹⁹⁾、³⁰⁰⁾、³⁰¹⁾、³⁰²⁾、³⁰³⁾、³⁰⁴⁾、³⁰⁵⁾、³⁰⁶⁾、³⁰⁷⁾、³⁰⁸⁾、³⁰⁹⁾、³¹⁰⁾、³¹¹⁾、³¹²⁾、³¹³⁾、³¹⁴⁾、³¹⁵⁾、³¹⁶⁾、³¹⁷⁾、³¹⁸⁾、³¹⁹⁾、³²⁰⁾、³²¹⁾、³²²⁾、³²³⁾、³²⁴⁾、³²⁵⁾、³²⁶⁾、³²⁷⁾、³²⁸⁾、³²⁹⁾、³³⁰⁾、³³¹⁾、³³²⁾、³³³⁾、³³⁴⁾、³³⁵⁾、³³⁶⁾、³³⁷⁾、³³⁸⁾、³³⁹⁾、³⁴⁰⁾、³⁴¹⁾、³⁴²⁾、³⁴³⁾、³⁴⁴⁾、³⁴⁵⁾、³⁴⁶⁾、³⁴⁷⁾、³⁴⁸⁾、³⁴⁹⁾、³⁵⁰⁾、³⁵¹⁾、³⁵²⁾、³⁵³⁾、³⁵⁴⁾、³⁵⁵⁾、³⁵⁶⁾、³⁵⁷⁾、³⁵⁸⁾、³⁵⁹⁾、³⁶⁰⁾、³⁶¹⁾、³⁶²⁾、³⁶³⁾、³⁶⁴⁾、³⁶⁵⁾、³⁶⁶⁾、³⁶⁷⁾、³⁶⁸⁾、³⁶⁹⁾、³⁷⁰⁾、³⁷¹⁾、³⁷²⁾、³⁷³⁾、³⁷⁴⁾、³⁷⁵⁾、³⁷⁶⁾、³⁷⁷⁾、³⁷⁸⁾、³⁷⁹⁾、³⁸⁰⁾、³⁸¹⁾、³⁸²⁾、³⁸³⁾、³⁸⁴⁾、³⁸⁵⁾、³⁸⁶⁾、³⁸⁷⁾、³⁸⁸⁾、³⁸⁹⁾、³⁹⁰⁾、³⁹¹⁾、³⁹²⁾、³⁹³⁾、³⁹⁴⁾、³⁹⁵⁾、³⁹⁶⁾、³⁹⁷⁾、³⁹⁸⁾、³⁹⁹⁾、⁴⁰⁰⁾、⁴⁰¹⁾、⁴⁰²⁾、⁴⁰³⁾、⁴⁰⁴⁾、⁴⁰⁵⁾、⁴⁰⁶⁾、⁴⁰⁷⁾、⁴⁰⁸⁾、⁴⁰⁹⁾、⁴¹⁰⁾、⁴¹¹⁾、⁴¹²⁾、⁴¹³⁾、⁴¹⁴⁾、⁴¹⁵⁾、⁴¹⁶⁾、⁴¹⁷⁾、⁴¹⁸⁾、⁴¹⁹⁾、⁴²⁰⁾、⁴²¹⁾、⁴²²⁾、⁴²³⁾、⁴²⁴⁾、⁴²⁵⁾、⁴²⁶⁾、⁴²⁷⁾、⁴²⁸⁾、⁴²⁹⁾、⁴³⁰⁾、⁴³¹⁾、⁴³²⁾、⁴³³⁾、⁴³⁴⁾、⁴³⁵⁾、⁴³⁶⁾、⁴³⁷⁾、⁴³⁸⁾、⁴³⁹⁾、⁴⁴⁰⁾、⁴⁴¹⁾、⁴⁴²⁾、⁴⁴³⁾、⁴⁴⁴⁾、⁴⁴⁵⁾、⁴⁴⁶⁾、⁴⁴⁷⁾、⁴⁴⁸⁾、⁴⁴⁹⁾、⁴⁵⁰⁾、⁴⁵¹⁾、⁴⁵²⁾、⁴⁵³⁾、⁴⁵⁴⁾、⁴⁵⁵⁾、⁴⁵⁶⁾、⁴⁵⁷⁾、⁴⁵⁸⁾、⁴⁵⁹⁾、⁴⁶⁰⁾、⁴⁶¹⁾、⁴⁶²⁾、⁴⁶³⁾、⁴⁶⁴⁾、⁴⁶⁵⁾、⁴⁶⁶⁾、⁴⁶⁷⁾、⁴⁶⁸⁾、⁴⁶⁹⁾、⁴⁷⁰⁾、⁴⁷¹⁾、⁴⁷²⁾、⁴⁷³⁾、⁴⁷⁴⁾、⁴⁷⁵⁾、⁴⁷⁶⁾、⁴⁷⁷⁾、⁴⁷⁸⁾、⁴⁷⁹⁾、⁴⁸⁰⁾、⁴⁸¹⁾、⁴⁸²⁾、⁴⁸³⁾、⁴⁸⁴⁾、⁴⁸⁵⁾、⁴⁸⁶⁾、⁴⁸⁷⁾、⁴⁸⁸⁾、⁴⁸⁹⁾、⁴⁹⁰⁾、⁴⁹¹⁾、⁴⁹²⁾、⁴⁹³⁾、⁴⁹⁴⁾、⁴⁹⁵⁾、⁴⁹⁶⁾、⁴⁹⁷⁾、⁴⁹⁸⁾、⁴⁹⁹⁾、⁵⁰⁰⁾、⁵⁰¹⁾、⁵⁰²⁾、⁵⁰³⁾、⁵⁰⁴⁾、⁵⁰⁵⁾、⁵⁰⁶⁾、⁵⁰⁷⁾、⁵⁰⁸⁾、⁵⁰⁹⁾、⁵¹⁰⁾、⁵¹¹⁾、⁵¹²⁾、⁵¹³⁾、⁵¹⁴⁾、⁵¹⁵⁾、⁵¹⁶⁾、⁵¹⁷⁾、⁵¹⁸⁾、⁵¹⁹⁾、⁵²⁰⁾、⁵²¹⁾、⁵²²⁾、⁵²³⁾、⁵²⁴⁾、⁵²⁵⁾、⁵²⁶⁾、⁵²⁷⁾、⁵²⁸⁾、⁵²⁹⁾、⁵³⁰⁾、⁵³¹⁾、⁵³²⁾、⁵³³⁾、⁵³⁴⁾、⁵³⁵⁾、⁵³⁶⁾、⁵³⁷⁾、⁵³⁸⁾、⁵³⁹⁾、⁵⁴⁰⁾、⁵⁴¹⁾、⁵⁴²⁾、⁵⁴³⁾、⁵⁴⁴⁾、⁵⁴⁵⁾、⁵⁴⁶⁾、⁵⁴⁷⁾、⁵⁴⁸⁾、⁵⁴⁹⁾、⁵⁵⁰⁾、⁵⁵¹⁾、⁵⁵²⁾、⁵⁵³⁾、⁵⁵⁴⁾、⁵⁵⁵⁾、⁵⁵⁶⁾、⁵⁵⁷⁾、⁵⁵⁸⁾、⁵⁵⁹⁾、⁵⁶⁰⁾、⁵⁶¹⁾、⁵⁶²⁾、⁵⁶³⁾、⁵⁶⁴⁾、⁵⁶⁵⁾、⁵⁶⁶⁾、⁵⁶⁷⁾、⁵⁶⁸⁾、⁵⁶⁹⁾、⁵⁷⁰⁾、⁵⁷¹⁾、⁵⁷²⁾、⁵⁷³⁾、⁵⁷⁴⁾、⁵⁷⁵⁾、⁵⁷⁶⁾、⁵⁷⁷⁾、⁵⁷⁸⁾、⁵⁷⁹⁾、⁵⁸⁰⁾、⁵⁸¹⁾、⁵⁸²⁾、⁵⁸³⁾、⁵⁸⁴⁾、⁵⁸⁵⁾、⁵⁸⁶⁾、⁵⁸⁷⁾、⁵⁸⁸⁾、⁵⁸⁹⁾、⁵⁹⁰⁾、⁵⁹¹⁾、⁵⁹²⁾、⁵⁹³⁾、⁵⁹⁴⁾、⁵⁹⁵⁾、⁵⁹⁶⁾、⁵⁹⁷⁾、⁵⁹⁸⁾、⁵⁹⁹⁾、⁶⁰⁰⁾、⁶⁰¹⁾、⁶⁰²⁾、⁶⁰³⁾、⁶⁰⁴⁾、⁶⁰⁵⁾、⁶⁰⁶⁾、⁶⁰⁷⁾、⁶⁰⁸⁾、⁶⁰⁹⁾、⁶¹⁰⁾、⁶¹¹⁾、⁶¹²⁾、⁶¹³⁾、⁶¹⁴⁾、⁶¹⁵⁾、⁶¹⁶⁾、⁶¹⁷⁾、⁶¹⁸⁾、⁶¹⁹⁾、⁶²⁰⁾、⁶²¹⁾、⁶²²⁾、⁶²³⁾、⁶²⁴⁾、⁶²⁵⁾、⁶²⁶⁾、⁶²⁷⁾、⁶²⁸⁾、⁶²⁹⁾、⁶³⁰⁾、⁶³¹⁾、⁶³²⁾、⁶³³⁾、⁶³⁴⁾、⁶³⁵⁾、⁶³⁶⁾、⁶³⁷⁾、⁶³⁸⁾、⁶³⁹⁾、⁶⁴⁰⁾、⁶⁴¹⁾、⁶⁴²⁾、⁶⁴³⁾、⁶⁴⁴⁾、⁶⁴⁵⁾、⁶⁴⁶⁾、⁶⁴⁷⁾、⁶⁴⁸⁾、⁶⁴⁹⁾、⁶⁵⁰⁾、⁶⁵¹⁾、⁶⁵²⁾、⁶⁵³⁾、⁶⁵⁴⁾、⁶⁵⁵⁾、⁶⁵⁶⁾、⁶⁵⁷⁾、⁶⁵⁸⁾、⁶⁵⁹⁾、⁶⁶⁰⁾、⁶⁶¹⁾、⁶⁶²⁾、⁶⁶³⁾、⁶⁶⁴⁾、⁶⁶⁵⁾、⁶⁶⁶⁾、⁶⁶⁷⁾、⁶⁶⁸⁾、⁶⁶⁹⁾、⁶⁷⁰⁾、⁶⁷¹⁾、⁶⁷²⁾、⁶⁷³⁾、⁶⁷⁴⁾、⁶⁷⁵⁾、⁶⁷⁶⁾、⁶⁷⁷⁾、⁶⁷⁸⁾、⁶⁷⁹⁾、⁶⁸⁰⁾、⁶⁸¹⁾、⁶⁸²⁾、⁶⁸³⁾、⁶⁸⁴⁾、⁶⁸⁵⁾、⁶⁸⁶⁾、⁶⁸⁷⁾、⁶⁸⁸⁾、⁶⁸⁹⁾、⁶⁹⁰⁾、⁶⁹¹⁾、⁶⁹²⁾、⁶⁹³⁾、⁶⁹⁴⁾、⁶⁹⁵⁾、⁶⁹⁶⁾、⁶⁹⁷⁾、⁶⁹⁸⁾、⁶⁹⁹⁾、⁷⁰⁰⁾、⁷⁰¹⁾、⁷⁰²⁾、⁷⁰³⁾、⁷⁰⁴⁾、⁷⁰⁵⁾、⁷⁰⁶⁾、⁷⁰⁷⁾、⁷⁰⁸⁾、⁷⁰⁹⁾、⁷¹⁰⁾、⁷¹¹⁾、⁷¹²⁾、⁷¹³⁾、⁷¹⁴⁾、⁷¹⁵⁾、⁷¹⁶⁾、⁷¹⁷⁾、⁷¹⁸⁾、⁷¹⁹⁾、⁷²⁰⁾、⁷²¹⁾、⁷²²⁾、⁷²³⁾、⁷²⁴⁾、⁷²⁵⁾、⁷²⁶⁾、⁷²⁷⁾、⁷²⁸⁾、⁷²⁹⁾、⁷³⁰⁾、⁷³¹⁾、⁷³²⁾、⁷³³⁾、⁷³⁴⁾、⁷³⁵⁾、⁷³⁶⁾、⁷³⁷⁾、⁷³⁸⁾、⁷³⁹⁾、⁷⁴⁰⁾、⁷⁴¹⁾、⁷⁴²⁾、⁷⁴³⁾、⁷⁴⁴⁾、⁷⁴⁵⁾、⁷⁴⁶⁾、⁷⁴⁷⁾、⁷⁴⁸⁾、⁷⁴⁹⁾、⁷⁵⁰⁾、⁷⁵¹⁾、⁷⁵²⁾、⁷⁵³⁾、⁷⁵⁴⁾、⁷⁵⁵⁾、⁷⁵⁶⁾、⁷⁵⁷⁾、⁷⁵⁸⁾、⁷⁵⁹⁾、⁷⁶⁰⁾、⁷⁶¹⁾、⁷⁶²⁾、⁷⁶³⁾、⁷⁶⁴⁾、⁷⁶⁵⁾、⁷⁶⁶⁾、⁷⁶⁷⁾、⁷⁶⁸⁾、⁷⁶⁹⁾、⁷⁷⁰⁾、⁷⁷¹⁾、⁷⁷²⁾、⁷⁷³⁾、⁷⁷⁴⁾、⁷⁷⁵⁾、⁷⁷⁶⁾、⁷⁷⁷⁾、⁷⁷⁸⁾、⁷⁷⁹⁾、⁷⁸⁰⁾、⁷⁸¹⁾、⁷⁸²⁾、⁷⁸³⁾、⁷⁸⁴⁾、⁷⁸⁵⁾、⁷⁸⁶⁾、⁷⁸⁷⁾、⁷⁸⁸⁾、⁷⁸⁹⁾、⁷⁹⁰⁾、⁷⁹¹⁾、⁷⁹²⁾、⁷⁹³⁾、⁷⁹⁴⁾、⁷⁹⁵⁾、⁷⁹⁶⁾、⁷⁹⁷⁾、⁷⁹⁸⁾、⁷⁹⁹⁾、⁸⁰⁰⁾、⁸⁰¹⁾、⁸⁰²⁾、⁸⁰³⁾、⁸⁰⁴⁾、⁸⁰⁵⁾、⁸⁰⁶⁾、⁸⁰⁷⁾、⁸⁰⁸⁾、⁸⁰⁹⁾、⁸¹⁰⁾、⁸¹¹⁾、⁸¹²⁾、⁸¹³⁾、⁸¹⁴⁾、⁸¹⁵⁾、⁸¹⁶⁾、⁸¹⁷⁾、⁸¹⁸⁾、⁸¹⁹⁾、⁸²⁰⁾、⁸²¹⁾、⁸²²⁾、⁸²³⁾、⁸²⁴⁾、⁸²⁵⁾、⁸²⁶⁾、⁸²⁷⁾、⁸²⁸⁾、⁸²⁹⁾、⁸³⁰⁾、⁸³¹⁾、⁸³²⁾、⁸³³⁾、⁸³⁴⁾、⁸³⁵⁾、⁸³⁶⁾、⁸³⁷⁾、⁸³⁸⁾、⁸³⁹⁾、⁸⁴⁰⁾、⁸⁴¹⁾、⁸⁴²⁾、⁸⁴³⁾、⁸⁴⁴⁾、⁸⁴⁵⁾、⁸⁴⁶⁾、⁸⁴⁷⁾、⁸⁴⁸⁾、⁸⁴⁹⁾、⁸⁵⁰⁾、⁸⁵¹⁾、⁸⁵²⁾、⁸⁵³⁾、⁸⁵⁴⁾、⁸⁵⁵⁾、⁸⁵⁶⁾、⁸⁵⁷⁾、⁸⁵⁸⁾、⁸⁵⁹⁾、⁸⁶⁰⁾、⁸⁶¹⁾、⁸⁶²⁾、⁸⁶³⁾、⁸⁶⁴⁾、⁸⁶⁵⁾、⁸⁶⁶⁾、⁸⁶⁷⁾、⁸⁶⁸⁾、⁸⁶⁹⁾、⁸⁷⁰⁾、⁸⁷¹⁾、⁸⁷²⁾、⁸⁷³⁾、⁸⁷⁴⁾、⁸⁷⁵⁾、⁸⁷⁶⁾、⁸⁷⁷⁾、⁸⁷⁸⁾、⁸⁷⁹⁾、⁸⁸⁰⁾、⁸⁸¹⁾、⁸⁸²⁾、⁸⁸³⁾、⁸⁸⁴⁾、⁸⁸⁵⁾、⁸⁸⁶⁾、⁸⁸⁷⁾、⁸⁸⁸⁾、⁸⁸⁹⁾、⁸⁹⁰⁾、⁸⁹¹⁾、⁸⁹²⁾、⁸⁹³⁾、⁸⁹⁴⁾、⁸⁹⁵⁾、⁸⁹⁶⁾、⁸⁹⁷⁾、⁸⁹⁸⁾、⁸⁹⁹⁾、⁹⁰⁰⁾、⁹⁰¹⁾、⁹⁰²⁾、⁹⁰³⁾、⁹⁰⁴⁾、⁹⁰⁵⁾、⁹⁰⁶⁾、⁹⁰⁷⁾、⁹⁰⁸⁾、⁹⁰⁹⁾、⁹¹⁰⁾、⁹¹¹⁾、⁹¹²⁾、⁹¹³⁾、⁹¹⁴⁾、⁹¹⁵⁾、⁹¹⁶⁾、⁹¹⁷⁾、⁹¹⁸⁾、⁹¹⁹⁾、⁹²⁰⁾、⁹²¹⁾、⁹²²⁾、⁹²³⁾、⁹²⁴⁾、⁹²⁵⁾、⁹²⁶⁾、⁹²⁷⁾、⁹²⁸⁾、⁹²⁹⁾、⁹³⁰⁾、⁹³¹⁾、⁹³²⁾、⁹³³⁾、⁹³⁴⁾、⁹³⁵⁾、⁹³⁶⁾、⁹³⁷⁾、⁹³⁸⁾、⁹³⁹⁾、⁹⁴⁰⁾、⁹⁴¹⁾、⁹⁴²⁾、⁹⁴³⁾、⁹⁴⁴⁾、⁹⁴⁵⁾、⁹⁴⁶⁾、⁹⁴⁷⁾、⁹⁴⁸⁾、⁹⁴⁹⁾、⁹⁵⁰⁾、⁹⁵¹⁾、⁹⁵²⁾、⁹⁵³⁾、⁹⁵⁴⁾、⁹⁵⁵⁾、⁹⁵⁶⁾、⁹⁵⁷⁾、⁹⁵⁸⁾、⁹⁵⁹⁾、⁹⁶⁰⁾、⁹⁶¹⁾、⁹⁶²⁾、⁹⁶³⁾、⁹⁶⁴⁾、⁹⁶⁵⁾、⁹⁶⁶⁾、⁹⁶⁷⁾、⁹⁶⁸⁾、⁹⁶⁹⁾、⁹⁷⁰⁾、⁹⁷¹⁾、⁹⁷²⁾、⁹⁷³⁾、⁹⁷⁴⁾、⁹⁷⁵⁾、⁹⁷⁶⁾、⁹⁷⁷⁾、⁹⁷⁸⁾、⁹⁷⁹⁾、⁹⁸⁰⁾、⁹⁸¹⁾、⁹⁸²⁾、⁹⁸³⁾、⁹⁸⁴⁾、⁹⁸⁵⁾、⁹⁸⁶⁾、⁹⁸⁷⁾、⁹⁸⁸⁾、⁹⁸⁹⁾、⁹⁹⁰⁾、⁹⁹¹⁾、⁹⁹²⁾、⁹⁹³⁾、⁹⁹⁴⁾、⁹⁹⁵⁾、⁹⁹⁶⁾、⁹⁹⁷⁾、⁹⁹⁸⁾、⁹⁹⁹⁾、¹⁰⁰⁰⁾、¹⁰⁰¹⁾、¹⁰⁰²⁾、¹⁰⁰³⁾、¹⁰⁰⁴⁾、¹⁰⁰⁵⁾、¹⁰⁰⁶⁾、¹⁰⁰⁷⁾、¹⁰⁰⁸⁾、¹⁰⁰⁹⁾、¹⁰¹⁰⁾、¹⁰¹¹⁾、¹⁰¹²⁾、¹⁰¹³⁾、¹⁰¹⁴⁾、¹⁰¹⁵⁾、¹⁰¹⁶⁾、¹⁰¹⁷⁾、¹⁰¹⁸⁾、¹⁰¹⁹⁾、¹⁰²⁰⁾、¹⁰²¹⁾、¹⁰²²⁾、¹⁰²³⁾、¹⁰²⁴⁾、¹⁰²⁵⁾、¹⁰²⁶⁾、¹⁰²⁷⁾、¹⁰²⁸⁾、¹⁰²⁹⁾、¹⁰³⁰⁾、¹⁰³¹⁾、¹⁰³²⁾、¹⁰³³⁾、¹⁰³⁴⁾、¹⁰³⁵⁾、¹⁰³⁶⁾、¹⁰³⁷⁾、¹⁰³⁸⁾、¹⁰³⁹⁾、¹⁰⁴⁰⁾、¹⁰⁴¹⁾、¹⁰⁴²⁾、¹⁰⁴³⁾、¹⁰⁴⁴⁾、¹⁰⁴⁵⁾、¹⁰⁴⁶⁾、¹⁰⁴⁷⁾、¹⁰⁴⁸⁾、¹⁰⁴⁹⁾、¹⁰⁵⁰⁾、¹⁰⁵¹⁾、¹⁰⁵²⁾、¹⁰⁵³⁾、¹⁰⁵⁴⁾、¹⁰⁵⁵⁾、¹⁰⁵⁶⁾、¹⁰⁵⁷⁾、¹⁰⁵⁸⁾、¹⁰⁵⁹⁾、¹⁰⁶⁰⁾、¹⁰⁶¹⁾、¹⁰⁶²⁾、¹⁰⁶³⁾、¹⁰⁶⁴⁾、¹⁰⁶⁵⁾、¹⁰⁶⁶⁾、¹⁰⁶⁷⁾、¹⁰⁶⁸⁾、¹⁰⁶⁹⁾、¹⁰⁷⁰⁾、¹⁰⁷¹⁾、¹⁰⁷²⁾、¹⁰⁷³⁾、¹⁰⁷⁴⁾、¹⁰⁷⁵⁾、¹⁰⁷⁶⁾、¹⁰⁷⁷⁾、¹⁰⁷⁸⁾、¹⁰⁷⁹⁾、¹⁰⁸⁰⁾、¹⁰⁸¹⁾、¹⁰⁸²⁾、¹⁰⁸³⁾、¹⁰⁸⁴⁾、¹⁰⁸⁵⁾、¹⁰⁸⁶⁾、¹⁰⁸⁷⁾、¹⁰⁸⁸⁾、¹⁰⁸⁹⁾、¹⁰⁹⁰⁾、¹⁰⁹¹⁾、¹⁰⁹²⁾、¹⁰⁹³⁾、¹⁰⁹⁴⁾、¹⁰⁹⁵⁾、¹⁰⁹⁶⁾、¹⁰⁹⁷⁾、¹⁰⁹⁸⁾、¹⁰⁹⁹⁾、¹¹⁰⁰⁾、¹¹⁰¹⁾、¹¹⁰²⁾、¹¹⁰³⁾、¹¹⁰⁴⁾、¹¹⁰⁵⁾、¹¹⁰⁶⁾、¹¹⁰⁷⁾、¹¹⁰⁸⁾、¹¹⁰⁹⁾、¹¹¹⁰⁾、¹¹¹¹⁾、¹¹¹²⁾、¹¹¹³⁾、¹¹¹⁴⁾、¹¹¹⁵⁾、¹¹¹⁶⁾、¹¹¹⁷⁾、¹¹¹⁸⁾、¹¹¹⁹⁾、¹¹²⁰⁾、¹¹²¹⁾、¹¹²²⁾、¹¹²³⁾、¹¹²⁴⁾、¹¹²⁵⁾、¹¹²⁶⁾、¹¹²⁷⁾、¹¹²⁸⁾、¹¹²⁹⁾、¹¹³⁰⁾、¹¹³¹⁾、¹¹³²⁾、¹¹³³⁾、¹¹³⁴⁾、¹¹³⁵⁾、¹¹³⁶⁾、¹¹³⁷⁾、¹¹³⁸⁾、¹¹³⁹⁾、¹¹⁴⁰⁾、¹¹⁴¹⁾、¹¹⁴²⁾、¹¹⁴³⁾、¹¹⁴⁴⁾、¹¹⁴⁵⁾、¹¹⁴⁶⁾、¹¹⁴⁷⁾、¹¹⁴⁸⁾、¹¹⁴⁹⁾、¹¹⁵⁰⁾、¹¹⁵¹⁾、¹¹⁵²⁾、¹¹⁵³⁾、¹¹⁵⁴⁾、¹¹⁵⁵⁾、¹¹⁵⁶⁾、¹¹⁵⁷⁾、¹¹⁵⁸⁾、¹¹⁵⁹⁾、¹¹⁶⁰⁾、¹¹⁶¹⁾、¹¹⁶²⁾、¹¹⁶³⁾、¹¹⁶⁴⁾、¹¹⁶⁵⁾、¹¹⁶⁶⁾、¹¹⁶⁷⁾、¹¹⁶⁸⁾、¹

ったという、この懐疑の経験の意味は、旧い日本から新しい日本への移行を、その内面における苦悩という形で自己のものとせざるを得なかったことにある。

小崎はこの内面の苦悩から改信へと飛躍することによって得たものを携えて、新しい日本に相渉っていく。そして小崎の信仰と思想の核となるものは、この苦悩から改信への飛躍にその萌芽があった。

小崎は、『自筆集』(1)のなかの「基督教ヲ信ズルノ理由」で、キリスト教を信するに至った理由として次の四つを挙げている。

- 一、教師ノ熱心ナルヲ感シタコト。
- 二、自己ノ小智ヲ以テ斯ノ如キ事(基督教)ノ真偽ヲ定ム可ラサルヲ知タコト。
- 三、基督教ノ証拠論ヲ読ミタルコト。
- 四、其理ニ抵抗スル能ハズ、信疑相半バシタルモ、遂折衝ニ依テ之ヲ確信シタコト。

この第一の教師の熱心に感動したことが、既に述べたように、小崎の求道心を喚起するきっかけとなった。小崎は、「余が信仰の実歴」において次のように述べている。

「私は此迄多くの漢学先生の講義を聴聞したなれども斯の如く精神の溢れた人に接したのは此が初めてであつた。此は不思議な事である、基督教には必ず何か不思議な力があるに相違ない、私は之で真面目に基督教を学ぶの心を起しました。」

かくして、小崎はキリスト教を学ぶ心を起したのであるが、信ずるといふ決断にまでは至らなかった。信じたいが、信じられないと

いうジレンマに小崎の苦しみは深まるばかりであった。

小崎をして入信へと飛躍せしめたものは、一夜ゼーンズを訪れたとき、ゼーンズからコリント前書十一章十一節「それ人の情は其中にある霊の外誰れか之を知らんや、此の如く神の情は神の霊の外に知るものなし」との箇所を示され、直接神に祈ることを勧められたことであった。小崎はこれを聞いて、「翻然悟る所あり、神に祈禱をして信仰の心を起すに至った。」⁽²⁾ と言う。明治九年三月一日、小崎が二十才のときである。

小崎がゼーンズから示されたコリント前書十一章十一節によって悟ったことは、前述の「基督教ヲ信ズルノ理由」で述べた第二、「自己ノ小智ヲ以テ斯ノ如キ事(基督教)ノ真偽ヲ定ム可ラサル」ことを知り、神の霊を受けなければ、宗教上のことは判らないということであった。

小崎は「実験」ということを強調するが、小崎にとって「実験」とは、霊によって生まれかわることである。「信仰の実験なき者即ち霊によりて生まれざるものには心靈界のことは全然暗黒である。」⁽³⁾ キリスト教では、神と人間との間に明確なる区別がある。人間はどこまでも人間であり、その智をもつてしては神のことは判らない。けれども、智を排除するのではない。智が霊によって深められる必要がある。その「智が霊によって深められること」が、キリスト教徒の「実験」なのである。

小崎によれば、「吾人が(宗教問題の)究極の標準ともなすべき者は霊によりて、聖められたる吾人の理性即ち吾人の宗教的意識である。」⁽⁴⁾ 以上述べたように、小崎の信仰は霊への信仰がその核にあ

り、小崎の改信のときの「実験」に由来しているのである。

小崎が改信にあたって、信ずることに困難を覚えたことは何であつたのか。『七〇年の回顧』で小崎は、「神の存在や靈魂不滅の教理は比較的容易に信ずることが出来たが、聖書に於て第一に礙いたのは奇蹟の物語である。続いてキリストの神性や十字架の死に至ては更に信ずることは困難であつた」と述べている。⁽¹¹⁾「余が改信の始末」では「殊に自然以上の天啓ありとの一事は余の如何にも信ずるに苦しみし所なり」と記している。以上のことから、小崎が信ずるに困難だつたのは、超自然との存在、ならびに超自然と自然との関係であつたことが判る。小崎はこの問題をブシュネルの『自然と超自然』(“Nature and the Supernature”, 1858)を読むことで、納得することができた。この書物を小崎はゼーンズより読むことを勧められた、⁽¹²⁾と云う。そして「再三之を読むで予の信念を養ふことを得た。是書は予が信仰の基礎を与へたるものなれば今に之を大切に保存して居る」とのことである。⁽¹³⁾

小崎はこのブシュネルの書物により超自然の存在、および自然との関係の弁証論を読み、大いに教えられ納得できたのである。しかし、小崎はこの書物に示された道理を承認しながらも、なお信疑相半ばしていた。祈祷による飛躍を必要としたのである。それ故、小崎はキリスト教を信ずるにいたる理由の第四として、祈祷によって確信をしたことをあげている。

小崎は超自然の存在をゼーンズから勧められたブシュネルの書物の熱読によって納得するとともに、祈祷による飛躍により改信へと

至つたのである。そして前述の霊と理性との関係と同じく、超自然的なもの自然法の法則を破壊しない。むしろ、自然法の法則も、キリスト教の教義に矛盾することなく理解することができるようになったのである。つまり、小崎にとつて、自然科学―小崎の場合は自然法則の探求を意味したのだが、とキリスト教とは衝突することはなかつたのである。以上、小崎の改信の由来について述べたが、このときに示された信仰をもつて、小崎は時代の課題に取り組んでいくのである。

二、小崎が取り組んだ課題

小崎がその生涯に取り組んだ課題は、三つあつた。⁽¹⁴⁾第一は、科学ことに進化論との関係である。小崎によれば「一九世紀の大思想家の進化論と聖書の万有観とは如何にして之を調和せしむることが出来るか。此は吾人が其の当時(小崎がキリスト教を学び始めた頃)大いに其の心を悩めたる問題」であつた。⁽¹⁵⁾小崎はこの進化論を霊との関連で理解し次のように主張する。

「天地の進化の理法の行はるるは、神の内住せる実証であつて、人類の上より見るときは、聖霊の啓導と云ふことが出来る。」⁽¹⁶⁾

神は始めに天地を造つた後、その天地を放任し去るのではなく、常に世界と共にあり、世界を教導啓発しているのである。小崎は霊による神の内住を主張することで、進化論とキリスト教が矛盾しないことを弁証する。このように、小崎は、神の内住性を説くが、神の超越性を無視したのではない。むしろ、前述のブシュネルに教えられ自然界を統御している超越神を信じていたのである。

小崎が取り組んだ課題の第二は、聖書を如何に解釈するかであった。小崎はこの課題に早くから取り組んでおり、明治二十一年一〇月発行の『六合雜誌』第九四号に「聖書のインスピレーション」と題する論文を発表している。さらに、明治二十二年六月二十九日から七月一〇日まで同志社で開催された第一回夏季学校において「聖書のインスピレーション」という講演をしている。この講演は横井時雄、金森通倫、宣教師デビス等の反対により記録に採録されなかった。

なお、小崎の『自筆集』には「神学通論」「神学一斑」の題目で書かれた原稿がある。そこには聖書論という章が設けられており、インスピレーションについて言及している。インスピレーション論は小崎の最も得意とする分野であった。¹⁷⁾

小崎は先ず、聖書は一点一面も誤りなしとする説―小崎はその説を「全部インスピレーション説」と名づけるのだが、その説は受け入れない。次に歴史・天文・地理その他科学に関わることに於いては誤りがあるが、聖書の宗教道徳に関わることに於いては誤りなしとする説―小崎はこの説を「部分インスピレーション説」と名づけるが、その説も受け入れない。何故ならば、小崎によれば、兩者つまり宗教道徳に関わることと、歴史・天文・地理に関わることの間には區別つがたいものがあるからである。それならば、聖書のインスピレーションとは何を意味するのか。小崎は聖書のインスピレーションとは神の霊の感化である、と主張する。聖書の記者は神の霊によつて、その書を書いたのである。したがって、それを読む私たちも同様に霊に満たされる。そして、聖書は私たちが艱難に遭遇し、憂愁に沈み、迷路を彷徨するとき、私たちの心に満足を与えてくれる。

小崎は自分のこの説を「倫理的（自筆集では道徳的）インスピレーション説」と名づけている。この考え方は、エール大学のラッド教授（教授来日するとき小崎はその講義を聞いている）、ならびにハーバート大学サイアー教授に教えられたものであるが、前節でのべた小崎の改信のときの実験に由来することは容易に推察できる。¹⁸⁾

なお、小崎はレヴェレーション (Revelation) とインスピレーション (Inspiration) とを区別していることに注目したい。レヴェレーションとは「神自己の現示にして罪人を救はん為め肉体を取つて現われし者はれなり」。¹⁹⁾ 他方インスピレーションとは「弟子達が此真理を受くるに於て神の感化を蒙りしものにして、其心意感情に著しき変化うけしこと是れなり」。²⁰⁾

小崎は三位一体を信じていた。²¹⁾ そして、小崎にとつて霊とは心・意志・感情に関わる全人格的なものであり、とくに道徳的感化力として道徳問題に結びつくのである。²²⁾ 小崎は「宗教に基づいた道徳」を提唱するのであるが、小崎にとつて、聖書論と徳育論、信仰と倫理は聖霊信仰においてひとつに結びつくのである。

小崎が生涯をかけて取り組んだ課題の第三は、「政治と宗教」との関係である。小崎は兩者を「宗教に基づいた道徳」によつて結びつけた。そのことについては別の論文で詳しく論じたので参照してほしい。²³⁾

本論で問題としたのは、小崎が「政治と宗教」の関係に生涯を通して、取り組んだ根拠である。「政治と宗教」の問題にみられる小崎の発想が若き日に学んだ儒教の影響のもとにあることは確かである。しかし、小崎のキリスト教への改信に由来することも指摘し

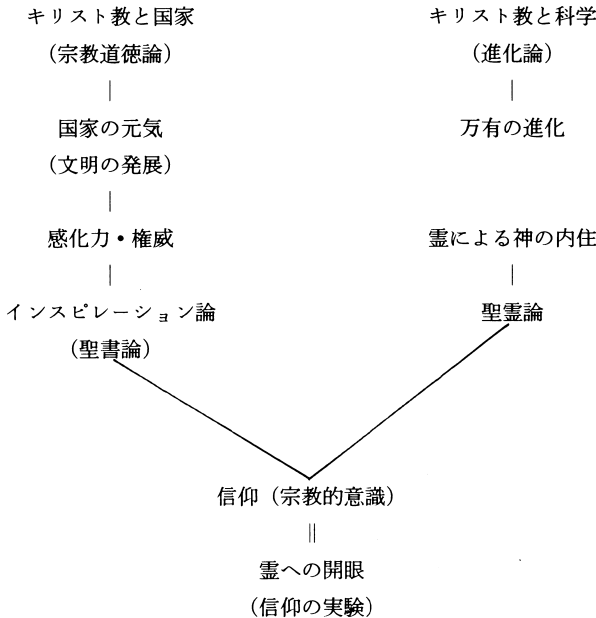
なければならぬ。つまり、小崎の聖霊信仰に「政治と宗教」の問題に取り組む根拠を見出すことができるのである。

小崎によれば、神の内住は決して自然界だけにとどまるものではない。政治・経済・社会万般の事業においても神は誘導している。したがって、政治も商業も工業も社会万般、皆神聖ならざるはなしと、小崎は主張する。それ故に、小崎は政治に関心を向け、キリスト教こそが、我国の元気を振作するものであるとの小崎の発言が生まれたのである。

以上、述べたことを図式で示すと下のようになる。

小崎の信仰と思想は、小崎の改信のときに示された聖霊への信仰がその核となっていたことが判る。小崎は自ら述べているように、信ずるに容易でなかった。けれども、そのお陰で終始一貫何等の信仰上の変動を見なかったのである。²⁵⁾

さらに小崎は知識・学問の最も進歩した人々に道を伝えることを自分の使命としていた。²⁶⁾ 具体的には、明六社の人々と交流し、さらには東京大学に起こった哲学会の会員となり、キリスト教の弁証に勉めたのである。小崎は近代日本プロテスタント・キリスト教の弁証家であった。²⁷⁾ そして、小崎をして弁証家たらしめたのは、改信に至るまでの苦悩であった。小崎は懷疑の苦悩の中で、自分の為の弁証を必要とした。それ故に、小崎は旺盛な勉学をし、後年時代の課題に取り組み、日本におけるキリスト教弁証家となることができたのである。



三、聖靈なる神

小崎の関心は終始一貫して、道德・国家・文明を内側から動かすものは何か、ということにあった。道德・国家・文明、より一般化しておよそ形而下のことは、形而上の力によって、真の働きをなすことができる、というのが小崎の基本的な考え方である。小崎によれば「国は形而下の事のみを以て治まる可らず。政治は社会事業の一小部のみ、法律の区域は僅かに行為上に現はるゝ事を制するに過ぎず。如何に政治を改良し法律を完備するも一人の罪人をも改心せしむる能はず、一家の不和をも調理するを得ざるべし。」²⁸⁾それ故、宗教道德を必要とするのである。

道德だけではだめである。道德にもし權威と感化力がなければ、徳目の羅列に終わってしまい、何等の機能を果たすことはできない。權威と感化力を付与する宗教が必要なのである。それ故、小崎は「宗教に基づいた道德」(宗教道德)を徳育問題の真の解決策として、提唱したのである。この「宗教に基づいた道德」は一己人の問題にとどまらず、国家の在り方に関連してくる。小崎は新日本建設の為の内的推進力を問題としたのである。たしかに、明治維新以来、外部の開化は着々と遂行されている。けれども、必要とされるのは内部の開化である。真の開化は内外がそろってなされなければならぬ。外部の開化だけではやがて壁にぶつかると。何故ならば、内なる開化によって外部の開化は推進されていくからである。小崎は国家の元気を問題とするのは、内なる推進力がともなうて、新日本は形成されていくからである。その国家の元気は、「宗教に基づいた道

徳」によって鼓舞される。宗教道德が盛んになれば、国家の元気は充溢してくる。日本国の盛衰はひとえに国家の元気の振作、宗教道德の盛衰如何に関わっている、というのが小崎の主張である。

このような、小崎の主張は小崎が聖靈なる神を強調するところにその根拠がある。²⁹⁾

真正の宗教であるキリスト教が道德・国家・文明の推進力となるのは、キリスト教の神が靈的存在であるからである。小崎は聖靈について次のように述べている。³⁰⁾

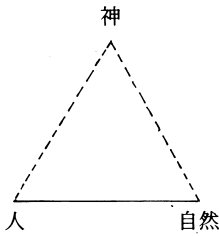
「聖靈の教理は基督教の教理中学生の最も等閑に附し去りたるものなり、或学者が基督教の教理今日の弱点は聖靈の教理を軽するにありと云ひたるも理なきに非ず。キリスト最終の聖約は聖靈基督信徒並に教会と共にあるにあり。預言者等が将来に來るべき新らしき時代の特徴となしたるもまた此聖靈の常住にあるなり。基督教は聖靈の降臨を以て生れたり。以後二千年の発達は聖靈の恩祐に因れりとなさざるべからず。若し今日の時代に何か名称を付すを得ば、今日は聖靈の時代なりとなさざるべからず。吾人は神の殿にして聖靈之に住するものなり。教会はキリストの体なるが聖靈は常に之と共にあるなり。」³¹⁾

このように、小崎は聖靈の教理を重んじ、神の内住を強調する。小崎によれば、この内住への関心は、進化論の影響によるものである。小崎は「進化論に依りて此を明になし得る所の思想二あり。一は開発の理即ち神の常導の義にて、二は神の内住の理これなり」と言ふ。³²⁾そして「神の内住に關しては進化論により吾人は神の動作は

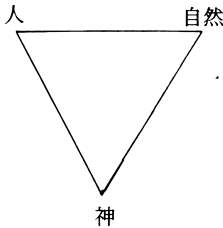
吾人の動作と異なり外部より物体の上に及ぼすに非ずして、内部より之を造化するにあるを見る。」

神は宇宙の外に超絶してはいるのではなく、宇宙の内に存するといふ思想がキリスト教から導きだされるのに大いなる役割を果たしたのが、進化論であった。⁽³⁴⁾しかも、神は自然界だけでなく、道徳・政治の世界にも内住し、その世界を内から動かす力なのである。したがって、キリスト教は道徳的行為に不可欠なる權威と感化力を付与することになる。さらに国家にとっては、国家の元気を振作するものとして国家繁栄の原動力となる。

小崎にとって、神・人（国家・歴史）・自然は、それぞれ、聖靈・感化力・進化として同じ真理の一面であり、ひとつの働きのなのである。そして進化論は、この神・人・自然を活ける全体として理解することを可能ならしめ、しかも外からではなく、内からの働きにおいて理解することを可能ならしめたのである。図式すれば次のようになる。（二四二頁の図を参照のこと）



(第 1 図)



(第 2 図)

進化論は第一図のように、人と自然から超越している神から、第二図のように、内住し、内からの推進力となることに貢献したのである。要するに、進化論は神観に変化をもたらしたのである。そして、この神の内住の考え方が、聖霊なる神の信仰と結びつくのである。

小崎は「進化論に由れる世界観の変化は即ち吾人宗教観の大変化する。」⁽³⁵⁾と述べ、その変化として次の三点を挙げる。

第一は「吾人の宇宙に関する観察点の変更にして、古来の聖書の観察点に復ることなり。」⁽³⁶⁾

第二は「政治経済社会万般の事業に関する観察点の変更なり。」⁽³⁷⁾

この第二の観察点の変更とは、「神の内住説を是認し、すべてのことは神の誘導に出づることを承認し」⁽³⁸⁾政治も商業も工業も社会万般が神聖なる事業とみなされることである。小崎によれば、「吾人が執るべき所の事業」として神聖ならざるはなく、また宗教的ならざるはなく、総ての学問も技芸も悉く宗教の意義を含まざるはなかるべし」⁽³⁹⁾したがって、小崎にとって政治の問題は即ち宗教の問題であった。

小崎が時代の動向に常に注目し、時代の動向に適用しつつ、その真の推進力としてのキリスト教の伝道に全力を傾注したのも、神が時代を導き、真理を一步一步明らかにしていくという信仰の故であった。小崎の聖霊信仰、そしてその信仰が進化論と結びつくことで、小崎の信仰と思想が形成されたのである。聖霊への信仰こそ、小崎の宣教活動を支え、小崎の生涯を貫くものであった、と言えよう。⁽⁴⁰⁾小崎の特に晩年のモットーは「輪廓打破」ということであった。⁽⁴¹⁾

「私は、過去十数年の間、いつも輪廓打破を叫んで止まないのがある。其の理由は、個々の教会に於ても、又は教会全体としても、孰れも現状に安んじて、更に進歩発展を試みる如き精神の見えないことである。」

小崎はひとつ現状に止まること、ひとつ輪廓に止まることを嫌う。たとえ、失敗しても、輪廓を破り、大きく発展することを願い、それを試みた牧師であった。

「輪廓打破」それは決して自らの力によってなされるものではなく、神の働きによるものである。神の働きに促されて人が働くときに、輪廓は打破されるのである。進歩発展も神の働きであるというのが、小崎の信仰であった。

最後に小崎の愛唱句を紹介しよう。

「神は盡なれば、拜する者も盡と真とをもて拜すべきなり。」(「ヨハネによる福音書」四章二四節)

註

(1) 小崎が自分の「改信」について最初に公に記したものと推定できる「余が改信の始末」(『九州文学』第三三号付録、明治三六年一月三〇日発行)によると、「余は熊本洋学校に於て学び、同校立身の諸氏と共にチェンス氏に就き基督教をも学びたれども、『月たらぬ者の』如く最後に召を受けたものなれば、彼の光栄ある花岡山の献身会にも列することなく、……」と記されている。この「月たらぬ者の」如く」とは使徒パウロのことである。(「コリント人への第一の手紙」一五章八節を参照)。

なお、引用は辻橋三郎『近代文学者とキリスト教思想』桜楓社、一九六九年の資料(写真版)による。旧漢字は新漢字に改めた。

(2) 『七十年の回顧』『小崎全集』第三卷、二五頁―二六頁。

(3) 「初めチェンス氏が七八の生徒を自宅に招き聖書の会説を為さるゝや、余は其招きに与せざりし。是より先きチェンス氏一日教場にて神の存在を説かるゝや、余は之を冷笑して更に之に耳を傾くることをせざりき、当時思へらく泰西の人形而下の理に明かなるも修身道徳に至ては昏昧取るに足らず、迷信の極神の存在を説くに至ると、其後氏の蒙昧を啓かんと目的にて氏の寓所に至りて仁義忠孝の道を説きたることもありたり今より之を思ひ出せば実に脇下に汗の滴るゝを覚ゆるなり。」「余が改信の始末」

(4) 『七十年の回顧』『小崎全集』第三卷、二四頁―二五頁。

小崎を苦しめたこととして、キリスト教に傾きつつあった親友たちとの友情が損なわれることもあった。

「一日已に信仰を起せし余と最も親密なる交際ある一人と一室に会し、既往将来を談じ宗教上信仰を異にするか故に早晚交情の疎遠に至るべきを話せしとき、悲嘆の余共に涙に咽ひたることありし。」「余が改信の始末」

(5) 小崎の『自筆集』は同志社大学神学部図書館に所蔵されている。

(6) 「余が信仰の実歴」は明治三八年五月一四日の説教の筆記。同年五月七日の説教筆記「余が二五年の経歴」と合本で、明治三八年九月、警醒社から発行されている。引用は同合本、四一

頁。

(7) 「子が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三七頁。

「余が信仰の実歴」によると、「恰も之と同時日のことであつた、海老名君が私の宿所を訪ひ私に祈祷の事を勧めた。私は神に感謝は為すべきであるけれども祈り願ふ事はよろしくないと云ふが如き考えを以て居ましたが、其頃より真実に祈る心が起つたのである。而して神の霊を受けなからねば宗教上の事は分らない事を実験によつて悟つたのである。」(四五頁)。海老名も最初祈祷には抵抗を感じざるを得なかつた。が、ゼーンズから、祈祷は「人たるの職分」であると論され自己の不明を知つたのである。海老名弾正「我が信教の由来と経過」昭和二二年、五七頁―五八頁。

(8) 明治四四年に出版された「基督教の本質」の結論部分で、コリント前書二章一節を引用し、「此れは決してパウロ一人の私見ではない。千九百年來神を信じキリストを信するものゝ齊しく実験する所である」と述べている。『小崎全集』第一卷、二〇七頁。

(9) 「子が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三七七頁。

(10) 同書、三七六頁。「吾人が信仰の標準となすべきものは外にあるの權威にあらず内にあるところの実験である。」同書三七八頁。小崎によれば靈によりて聖められたる理性は、個人の単独に存在するのではなく、キリスト者に共通するところである。したがつて、「吾人は吾人のこの宗教的意識を以て他人の宗教的意識に質し之が共通の意識なるや否やを確め之に学ぶところ

がなければならぬ。吾人は基督教会千九百年の歴史を研究し殊に当初に使徒等の宗教的意識を学ぶの必要あるは之が為めである。」三七八頁。

(11) 『小崎全集』第三卷、二五頁。

(12) 「余が信仰の実歴」では、「……キリストが神の子であるとか、救とか、奇跡とか、云ふ事に至ると百疑交々起りて如何にしても解決することが出来なかつた。」と述べられている。同書四二頁。

(13) 「子が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三七一頁。ブシネル (Bushnell, Horace 1802-1870) はアメリカの会衆派教会の牧師で自由主義神学者である。『基督教大事典』(教文館)を参照。なお、本書には、"As together constitution the one system of God" という副題がつけられている。明治三十年十一月に原野彦太郎による翻訳本が警醒社から出版されている。

(14) 「子の信仰の歴史に於いては……、第一の問題は理科学及哲学と信仰の關係問題であり、第二の問題は所謂聖書論と信仰の關係問題であつた。而して第三の問題は「基督教とは何ぞや」と云ふことであります。」「子が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三七九頁。本論では、第三の問題として「政治と宗教」との關係を挙げる。けれども、小崎の生涯にわたる課題は「基督教とは何か」に答えを見出すことであつた。

(15) 『基督教の本質』第一章「小崎全集」第一卷、十一頁。小崎によれば「不思議なことに、我國に於ては当時基督教を信するに當りて其の妨害を為すものは、従來の神、儒、仏の思想では

無く、又我固有の倫理観でもなく、却て外来の新思想であつた。」(同書、同頁)。したがって、キリスト教の弁証の努力は伝統思想に対してだけでなく外来の新思想に対して、より一層必要とされたのである。そのために小崎が貢献したことは、内村鑑三が指摘した通りである。「信仰復興のきざし」「聖書之研究」三五五号、昭和五年二月。

ヨーロッパでは、二〇〇〇年近くのキリスト教の伝統が存在するところに、進化論が提唱された。ところが、日本ではキリスト教と進化論がほぼ同時に紹介された。しかも進化論は、キリスト教批判の主要な武器として、日本に紹介されたのである。それだけに、日本の初代プロテスタント基督者は、キリスト教と進化論との調和を求め、キリスト教批判に答えんとした。小崎たちは、キリスト教の勉強とともに、進化論についての講義を受け両者の関係につき、自らの見解を持つようになつたのである。小崎が講義を受けた恩師については、「予が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三七二頁―三七三頁を参照。

明治思想における進化論の役割については、船山信一「明治哲学史研究」一九五九年、ミネルヴァ書房、二九四以下を参照。進化論とキリスト教との関係については、渡辺正雄『日本人と近代科学―西洋への対応と課題』岩波新書、一九七六年、「Ⅳ近代思想への対応―明治初期のダーウィニズム」一〇五頁以下を参照。

(16)『基督教の本質』第五章「イエスの教か又はパウロの教か」『小崎全集』第一卷、八三頁。なお、『我国の宗教及道德』(明治三

六年)第八章「進化論と基督教」では、次のように記されている。「現今の大問題は進化論と有神論の調和にあらずして進化論と基督教即ち如何に進化の理法を基督教の教理に應用すべきやの一事にあるなり。」「小崎全集」第三卷、四八〇頁。小崎は、キリスト教は進化論と矛盾しないことを論証するとともに、より積極的に、キリスト教は進化論と出会うことによつて、キリスト教の真理の従来隠された一面が、明白になつたと考えたのである。その一面とは、神の宇宙への内任と聖霊の働きである。小崎は次のように述べる。「此思想(進化論の先鞭を着けたレッスンングやラマークの思想)が世界観に及ぼせる影響の大なるは勿論、宗教思想に及ぼしたるの勢力は極めて大なるものにて、従来の静状的の観察は變じて動状的となり、旧時の無機的思想は變じて有機的生物的となりたり。為に有神論其他宗教思想全体に大なる影響を及ぼし、従来の超然的の神は變じて内任の神となり聖霊の恩化、天啓、其他に於ても著しき變動を見るに至れり。」「基督教の根本思想」『我国の宗教及道德』第十一章「小崎全集」第三卷、五二〇頁―五一頁。

(17)『六合雜誌』一一〇号、一一一号、一一二号には、聖書のインスピレーションに関する諸氏の論説と書簡を紹介している。

その名前だけを挙げておく。山田寅之助、ラーネッド、山鹿旗之進、デョレスト、松村介石(以上一一〇号)。カクラン、松山高吉、デビス、杉山重義、イビー、平岩愼保、大西祝、奥野昌綱、綱島佳吉(以上一一一号)、ナックス、瀬川浅、大嶋正健(以上一一二号)。「インスピレーション」問題は、明治二

○年代、ことにその前半に大いに論じられたテーマである。例えば、徳富蘇峰は「インスピレーション」と題する論文を『國民之友』二二号、明治二一年五月に発表している。この論文について、笹淵友一氏は次のように述べられている。「(蘇峰の)『インスピレーション』は『觀察』(『國民之友』第一八六号明治二六年四月)と共に透谷の内部生命論に大きな影響を与えたものである。尤もインスピレーションを論ずることは、当時の基督教界に於ては、リヴィバルの流行と共に一の傾向であった。蘇峰の論もこれらと関連をもつてゐる」『北村透谷』福村書店、三二五頁。

(18) 「予等は最初から斯くの如き聖書論(高等批評による聖書解釈)に服することが出来なかつたが、恰も好し其頃ラッド博士の『聖書とは何ぞや』と云ふ書を手にし此問題に付き早くも明瞭なる解決を得た為め高等批評などは少しも恐れなくなつたのである。其後ハーバード大学教授サイアー氏の著『聖書に対する態度の変化』なる小冊子を読み更らに此の問題に関して明確なる見解を得るに至つた。」予が信仰の立脚地』『小崎全集』第六卷、三七四頁―三七五頁。ラッド博士は明治二五年に來日し、同志社等で講義をしている。

(19) 『聖書のインスピレーション』『六合雜誌』九四号、明治二一年十月。

(20) 同書。なお『六合雜誌』一〇三号に發表された「聖書のインスピレーション」で小崎は次のように述べる。「本来黙示と『インスピレーション』とは別義にして同一に非らず。黙示とは是

れ神預言者に依つて我々人類に神旨を指示するか、或はキリストに依つて其の恩恵を伝へらるゝことに用ひる語なり」『小崎全集』第六卷、一九九頁。

(21) 小崎には『三位一体の説』と題する書物がある。警醒社、明治二四年一〇月。

(22) 小崎が新神学・ユニテリアン主義に充分に理解を示しながら、その主義を批判する理由は「新神学の基督教は智と意の方面には稍々長じて居るも情の一面に大いに欠けたる所あり」。そして、情に欠けたるキリスト教は道德的感化力を持たない。それ故、将来のキリスト教は「比較的に智情意の三点を同様に具備せる」『福音主義の基督教而かも進歩的福音主義の基督教』である。『基督教の本質』第二章「将来の基督教」『小崎全集』第一卷、二〇〇頁。

熊谷一綱『キリスト教信仰と教育』Y M C A出版、一九七六年、三三頁―三四頁。

(23) 拙稿「小崎弘道の徳育論」『人文学会誌』(武蔵大学)一九九二年。

(24) 『我国の宗教及道德』第八章「進化論と基督教」『小崎全集』第三卷、四八七頁。

「主イエスが聖靈に付いて教へ給ふたところは即ち左の通りである、『我猶汝等に多く語るべき事あれども今汝等を導きて総ての真理を知らしむべし』予は此聖靈の誘導なるものを深く信ずるものである。此聖靈の誘導なるものは神学若しくは哲学よ

り見れば神の内住であつて、理科学の方面から見れば万有の進化と称するを得べく、又人類歴史の方面より見れば文明の発展と云ふべきものである。「予が信仰の立脚地」『小崎全集』第六卷、三八三頁―三八四頁。小崎にとつて、神の内住・万有の進化・文明の発展はともに聖霊の誘導によるものである。

- (25) 「私は終始一貫今に至る迄何等信仰上の變動を見ないのは、全く最初信するに容易でなかつたお陰である。何となれば聖書論や奇蹟論、キリスト論、贖罪論の如き教理に対し、新神学及自由思想に依り多くの難問題が提供され、人々は之が解釈に苦しむ結果遂に不信仰に陥る者の少くなかつた時に当り、私が其爲に何等の動搖をも受けなかつたのは、初期に於て既に略同様の問題に苦悶し、且相当の研究を重ねて確固たる信念を握つて居つた故である。」「七十年の回顧」『小崎全集』第三卷、二七頁。

- (26) 「……私は当時の伝道師が唯（下層）社会の人のみを相手とし道を伝へ又路傍説教などとして途上の人のみを相手とすることに満足しなかつた。私は先づ知識学問の最も進歩した人々に道を伝へんことを務め、訪問伝道として此等の人々を訪問し彼等と交際することを始めた。」「余が二五年の経歴」十九頁。
- (27) 弁証家については拙論「小崎弘道の宗教思想」『日本思想史学』第十七号、昭和六十年、一頁、八頁を参照。

- (28) 『政教新論』第七章「宗教道德の必要」『小崎全集』第三卷、三四三頁。

- (29) 「聖霊なる神の信仰は吾人信仰の生活に決して欠くべからず。

吾人の神に於けるの信仰は兎角、超越的 (Transcendental) に流るゝの弊あり。唯聖霊なる神の信仰あつて、神の普遍性 (Emanent) なるを明に認むるを得。」「三位一体の説」『小崎全集』第一卷、五六二頁。

- (30) 『我國の宗教及道德』第八章「進化論と基督教」『小崎全集』第三卷、四八二頁―四八三頁。

(31) 小崎は神の内住性、聖霊なる神を強調するが、決して神の超越性を否定しない。ある場合は神の超越性を強調する文章を書いてはいる。「思想界近時の傾向は神の内住に重きを置き過ぎるより知らず識らずの間に於て凡神論に陥らんとするのである。

神の内住は一面の真理であるも全体の真理でない。吾人はその半面に於て必ず神の超越なるものを認めざるを得ない。神の内住のみを重じ人類の神性を主張する人々はその結果神人の差別を無視し神の人格をよし否定せざるも之を軽するに至るのである。」「基督教の本質」、『小崎全集』第一卷、一六二頁。

- (32) 『小崎全集』第三卷、四八五頁―四八六頁。

- (33) 同書、四八六頁。

(34) 同書、四八二頁。「従来宇宙は死せる宇宙にてたゞ大能の神に依りて造られ維持せらるゝ者となされたが、今日之を以て神の常に住み給ふ活ける宇宙と思惟せらるゝに至れり。」(同頁)。

- (35) 同書、四八六頁。

(36) 「従来の観察点は全く無神的、唯物的にて神の存在を認るも宇宙の外にありて之に關せず、而して物質は神に独立して立ち

得るが如く見做し、宇宙は単に自然法にて維持せらるゝが如く思惟せられたり。然れども進化論に依りて此觀察は全く一変し宇宙は活ける神の動作にして、其最小部分の変化も神の動作に關らざるはなきこととなりぬ」同書、四八六頁―四八七頁。

(37) (38) (39) 同書、四八七頁。

(40) 小崎の聖霊への信仰(実験)は、理性(理論)、歴史(事実)とともに、キリスト教の真理たることを証明する。「基督教を信ずるの理由」『六合雜誌』七一号。明治一九年十一月、『小崎全集』第六卷、七四頁。

なお、小崎は「幽霊」にも関心を示している。「メスメリズム及びスピリチュアリズム」『六合雜誌』六四号。明治一九年四月、『小崎全集』第六卷、四三頁―四四頁。

(41) 「私は皆さんの御承知の通り四度程米国に行つたが、其間に考へ付いた事は何であるかと云ふに輪廓打破といふ事である。」「教師の読むべき書籍に就て」昭和十年十月組合教会教師会講演。『小崎全集』第六卷、四一八頁。

(42) 『日本帝国の教化(日本基督教伝道論)』昭和四年十月。『小崎全集』第二卷、五七二頁。小崎によれば、「輪廓打破は今日の急務である。」同書、五七三頁。

(43) 『輪廓打破』一九六七年、靈南坂教会弘道会刊。三〇頁。

土肥昭夫氏の「小崎弘道―指導者の帰趨」『同志社の思想家たち』下、七二頁によると、イザヤ書四〇章三〇節―三二節も常に愛唱した聖句であるとのことである。文語訳で引用する。「年少きものもつかれてうみ壯なるものも衰へおとろふ、然

はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん、また驚のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めども倦ざるべし」

(本論は、筆者が学生時代から取り組んだ小崎研究のまとめである。その一部は、日本基督教学会・日本思想史学会で口頭発表したものである。なお、小崎弘道、内村鑑三を中心とする筆者の日本キリスト教思想史研究にたいして、東海大学に勤務していたときに、同大学総合研究機構から研究奨励金が与えられた。その成果が本論である。そのことを感謝してここに記しておきたい。)

(東洋英和女学院短期大学教授)